広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第１号　2020　637－646

進路分化からみる中国の「三本大学生」の意識

― 遼寧省を事例として ―

呉　　彤

（2020年10月５日受理）

Students' Career Differentiation in 'San-Ben University' of China
― A case study in Liaoning province ―

Tong Wu

Abstract: With the popularization of higher education, scarcity of jobs for university undergraduates is becoming a serious problem in China. It has been observed that students from 'San-Ben Universities' have less chance of finding a job. 'San-Ben Universities', acknowledged as private universities and independent colleges, have increased in China in recent years. However, not much research has been conducted on students of 'San-Ben Universities'. For this reason, this paper aims to explain the mechanism of career expectations of students from 'San-Ben Universities' and analyzes the influence of learning behavior on career expectations. As a result, it was found that students from 'San-Ben Universities' have the same desire to go to graduate school as students from other famous universities, and that their learning behaviors influence their career expectations. Based on these findings, it may be deduced that the tendency of "schooling" in 'San-Ben University' influence students' career expectations..

Key words: university students, learning behavior, career expectations
キーワード：大学生，学習行動，進路意識

１．問題の所在

本稿の目的は中国の「三本大学」（中国の呼称であり，ランクの低い大学のことを指す）における学生の進路意識に焦点を当て，「三本大学生」の特徴を明らかにすることにある。

中国では，経済発展に伴って高等教育は飛躍的な拡大を遂げた。1999年から高等教育の大衆化が始まり，2019年にはその進学率が50％を越え，中国の大学はすでにユニバーサル段階に入ったと言えよう。このような大衆化の急速な進展に伴い，就職難問題はますます深刻になっており，大卒者の「特権」も次第になくなり，いわば「卒業＝失業」という状況にまでなっている。とくに，ランクの低い大学を卒業した学生，つまり「三本大学生 」は就職活動において，苦しい立場に追い込まれているとされる。

なぜ「三本大学生」が深刻な就職難に直面しているのかを説明する前に，まず「三本大学」について説明する必要があるだろう。文革直後に，全国統一試験が再開され，大学生の募集をめぐって様々な政策が実施されてきた。とくに1978年，「願書に志望校を希望する時から，重点校と非重点校とを別欄に記入するというように，重点・非重点の区別の明確化が進んだ」（大塚2007，p.130）。この時期から，重点校，非重点校というように大学がカテゴライズされ始めたと考えられ

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：山田浩之（主任指導教員），小川佳万，藤村正司

る。さらに，1999年大衆化の始まりとともに，人材を確保するために，全国統一試験の選抜作業は第一，第二，第三グループというように，各グループで「足切り点」[1] を設定し，時期をずらして実施することになった。このようにして大学は「一本大学」「二本大学」「三本大学」とランキングされるようになった。「一本大学」は985校と211校[2] を含む「エリート校」である。その一方で，「三本大学」はより低い社会的地位にあるものであり，「お金さえあれば，誰でも行けるだろう」「卒業証書はただの紙」と揶揄され，就職活動においては相対的な弱者とされる（賈，2014）。

熊（2013）は「985大学，211大学，一本大学，二本大学，三本大学など，大学がランク付けられているからこそ，就職の不平等が生じており，就職難がさらに深刻になるのだ」と指摘した（p.37）。「ランキングに縛られず，大学と専門を自由に選べるようにする」という国務院の思想に沿って，2015年から山東省や遼寧省などといった省は選抜の第三期グループを第二期グループに合併することが始まった。その結果，大学のランク付けを緩和し，低いランキングの大学生がより公平な就職機会を与えられると予想されている。しかし，「三本大学」という呼称が公的には無くなるにもかかわらず，「独立学院」[3] などといった特有な言い方で「三本大学」を指す言葉が存在し，一般的にもそのように認識されている。そのため，「三本大学」は実質的には合併後も通称として存在していると考えられる。さらに，『中華人民共和国民弁教育促進法実施条例』が2004年３月に公布されたことをきっかけに，中国政府は民弁大学の設置に肯定的な態度を示しはじめた（邵2014）。今後，「三本大学」は「民弁大学」[4] と「独立学院」という形態でさらに増加することが予測されている（喩2013，鮑2005，邵2014）。つまり，就職難問題が急速に進む中国において，就職活動において相対的な弱者とされている「三本大学生」の数が徐々に増えていると考えられる。このような状況において，「三本大学生」を研究対象とする必要性は以前よりも高まっていると言えよう。

そのような背景にもかかわらず，中国では大学研究の視点が依然として985校・211校に偏っている。だが，「三本大学生」に焦点を絞った研究が近年になってわずかながら行われるようになっている。例えば，魏・劉（2010）は，「三本大学生」は自己肯定感が低い傾向にあると述べ，就職する際にエリート大学生よりも，競争に対する意欲が低いことを明らかにしている。賈（2014）は，山西省の「三本大学」の卒業生にインタビュー調査を行い，「三本大学生」に対する社会からの偏見と学生らが就職する際に直面したジレンマを描き出した。また，いわゆる「学歴ロンダリング」を目的とし，名門大学の大学院への入学を志望する「三本大学生」が増加しつつあるという「進学熱現象」についての議論を展開した。また，鮑（2006）は「就業意識」に焦点をあて，「公セクター」との比較により，「地方・農村などの非都市部での就職に対して積極的な姿勢を示している」ことや「専門分野での継続志向が強い」ことなどのような「民セクター」（「三本大学」の）学生の特徴を提示した。

これら一連の研究から，就職する際の「三本大学生」を追い込む磁場の一端が明らかにされた。しかし，これらの研究の視点は単眼的であり，「三本大学生」の進路意識を解明するためには，いまだに大きな限界を孕んでいる。まず，これらの研究では，「就職意識」や「進学意識」のどちらかにだけ着目し，「大手企業以外を志望する」や「とにかく大学院に行く」などのような「三本大学生」の消極的な進路意識を提示しているが，そもそも「三本大学生」が上記のような，具体的な進路意識を形成する前に，彼・彼女らの進路分化（就職するか進学するか）の意識はいかに形成され，また，いかなる要因に影響されたのかについては看過されてきた。しかし，高等教育の大衆化が急速に進んでおり，大学院生の募集規模も徐々に拡大している中国の現在の社会的背景を考慮すれば，それは「三本大学生」の進路意識を解明するための一つの鍵になると思われる。また，呉（2020）が「三本大学生」はエリートとされている「一本大学生」よりも，授業への意識がさらに高いことを明らかにした。さらに，山田(2010b)の理論を援用し，「三本大学」は高校などと同様に，教えられた知識をただ受容するだけの「学校」になっている，いわゆる「学校化」している可能性があると指摘した。「三本大学生」のこのような高い学習への意識がいかに彼・彼女らの進路意識に影響しているのか，これについても検討する必要性があると言えよう。

以上を踏まえ，本稿では「三本大学生」が進路選択する際の意識に重点を置き，「一本大学生」や「二本大学生」と比較することにより，「三本大学生」の特徴を浮き彫りにしたい。このような作業を通じて，就職難問題の荒波を越えて形成される「三本大学生」の進路意識を多角的に解明し，少しでもその波を和らげる案を提示したい。そのことにより，中国における大学の大衆化によって新たに登場した学生像をさらに理解するための地平を構築したい。

表１：調査対象の概要

		一本大学		二本大学	三本大学		合計
		A大学	B大学	C大学	D大学	E大学	-
回答票者数（名）		146	99	434	152	192	1023
有効回答者数（名）		144	97	419	150	182	992
割合（有効回答／回答票数）		95.60%	95.00%	96.50%	98.60%	95.00%	97.00%
有効回答者数の合計（名）		241		419	332		992
性別	男性	56.80%		19.70%	38.00%		345（35.00%）
	女性	43.20%		80.30%	62.00%		644（65.00%）
学年	一年生	22.50%		37.30%	41.70%		346（35.00%）
	二年生	32.10%		33.70%	0.60%		218（22.00%）
	三年生	31.30%		25.90%	48.30%		342（35.00%）
	四年生	14.20%		3.10%	9.40%		78（8.00%）
専門	文系	10.80%		66.90%	0.30%		300（30.80%）
	理系	87.10%		4.40%	99.10%		551（56.50%）
	芸術	0.00%		21.80%	0.60%		91（9.30%）
	その他	2.10%		6.90%	0.00%		33（3.40%）

２．調査の方法

2.1 調査概要

アンケート調査は，2018年５月19日から2018年６月８日にかけて，遼寧省にある五つの大学で行った。そして，A 大学，B 大学を「一本大学」，C 大学を「二本大学」，D 大学，E 大学を「三本大学」に位置付けた。なお，A 大学（全国大学ランキングで100位前後）と B 大学（30位前後）は985校，211校であり，エリート校とされている。C 大学は中堅大学であり，D 大学は1999年に設置された民弁大学である。E 大学は1999年に設置され，F 大学という「二本大学」の独立学院であり，2016年に民弁大学に転換した。

2.2 調査対象者の概要

調査対象の概要については表１に示している。回答者数は1023名である。有効回答者数は，「一本大学」241名，「二本大学」419名，「三本大学」332名の計992名（有効回答率97%）であった。多少のバラツキはあるものの，各大学で大きな差はないと言ってよかろう。「一本大学」のサンプルでは男性56.8%，女性43.2%と男女数の差があまりないが，「二本大学」と「三本大学」では女性に偏ったサンプルとなっている。専門について，「一本大学」「三本大学」は理系に偏ったサンプルとなっているが，「二本大学」は文系に偏っていることが分かる。

３．進路意識に影響を及ぼす諸変数

現在の大学は「教育の最終段階として，社会と学校を繋ぎ合わせる役割を持つと認識されている」（山田，葛城2007，p.22）。また「卒業後の就職は大学生にとって大きな関心事であり，大学生活は就職するための準備期間として大きく既定されている」（西本，2008 p.125）。つまり，大学生の進路意識は学習の取り込み方や学習に対する考え方などといった大学での学習行動や大学生活に対する意識と関連していると考えられよう。したがって，本章では，大学ランクの影響を考慮する前に，まず学習行動（学習する理由を含む）および，大学での生活という二つの面から，進路意識との関連を明らかにする。

3.1 大学での学習行動

本節では，大学での学習行動と進路意識がいかなる関連性を持っているのかについて明らかにしたい。なお，質問紙では大学での学習行動について，学習する

表２：学習理由の因子分析

	学習の肯定	他動的学習
新しい知識を知ることが好きだから	0.716	-0.087
自分の専門が好きだから	0.672	0.130
授業が面白いと思うから	0.668	0.225
先生に気に入れたいから	0.585	0.268
大学の生活を充実したいから	0.555	-0.165
資格を取りたいから	0.471	0.134
ただ卒業したいだけだ	-0.081	0.609
きちんと勉強しないと家族に言われるから	0.121	0.608
ほかにしたいことはないから	0.083	0.472
留学したいから	0.304	-0.009
累積 %	24.032	35.595
分散の %	24.032	11.563
回転後の負荷量平方和	2.403	1.156
Kaiser-Meyer-Olkin	0.802	

因子抽出法: 最尤法
回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

理由を含めて，広く聞いている。まず，学習する理由を構成する諸因子について述べたい。

学習する理由に関して，質問紙に「新しい知識を得ることが好きだから」などといった10の項目を設けた。それを因子分析（最尤法，バリマックス回転）した結果は表２になる。表２からわかるように，学習する理由に関して二つの因子が抽出された。第一因子は「自分の専門が好きだから」や「授業が面白いと思うから」など，積極的に学習について考えている項目から構成されているため，【学習の肯定】と命名した。第二因子は「ただ卒業したいだけだ」や「きちんと勉強しないと家族に言われるから」などのような理由によって構成されたため，【他動的学習】と名付けた。

続いて，大学での学習行動について，質問紙19の項目を設けている。それを因子分析（最尤法，バリマックス回転）した結果は表３となる。因子負荷量の平方和，および，解釈しやすさの観点から，三つの因子を抽出し，以下のように命名した。

第一因子：【授業重視】

この因子は「授業内容について質問することがある」，「よく予習復習する」，「きちんとノートを取りながら授業を聞いている」，「興味を持つ授業がある」などの項目から構成されている。これらの項目は授業に対する非常に高い関心を示しているため，【授業重視】と命名した。

第二因子：【自主学習】

「図書館が閉館する前までずっと勉強することが多い」，「開館する時間から図書館で勉強し始めるように頑張っている」，「自発的に自習を行っている」という三つの項目によって構成され，学習の自主性を表す因子であるため，【自主学習】と命名した。

第三因子：【不真面目】

「授業中で勉強と関係ないことをする」，「授業中でよく居眠りをする」，「授業で私語をすることが多い」などの項目によって構成されているため【不真面目】と命名した。

さて，上記の学習行動に構成する諸因子は進路意識との間にどのように関連しているのかについて，分散分析を行った結果は表４となる。表４からわかるように，【授業重視】や【自主学習】および【他動的学習】という三つの因子とも，進路意識とは統計的に有意であった。つまり，大学生の進路意識は大学での学習行動（意識）と関連していることになる。

まず，就職希望があるという部分を見てみよう。【授業重視】という因子得点の平均値を見ると，「いいえ」と回答した者の平均値の -0.125と比べて，「はい」と回答した者は0.115と，より高い値になっている。【他動的学習】という因子にも同じ傾向が見られた。すなわち，「はい」と回答した者の得点は0.167と，「いいえ」と回答した者より高い値となっている。それに反し

表３：学習行動の因子分析

	授業重視	自主学習	不真面目	因子4	因子5
授業内容について質問することがある	0.727	0.094	-0.044	0.082	0.225
よく予習復習する	0.601	0.269	-0.146	0.079	0.244
歩きながら、覚えたりして勉強することがある	0.526	0.403	0.077	0.064	-0.088
きちんとノートを取りながら授業を聞いている	0.488	0.142	-0.151	0.141	0.446
興味を持つ授業がある	0.383	0.031	-0.094	0.301	0.289
よく朝の自習をする	0.382	0.199	-0.036	0.108	0.021
図書館が閉館する前までにずっと勉強することが多い	0.245	0.869	-0.036	0.005	0.092
開館する時間から図書館で勉強し始めるように頑張っている	0.349	0.728	-0.026	-0.013	0.003
自発的に自習を行っている	0.114	0.581	-0.054	0.000	0.310
授業中で勉強と関係ないことをする	-0.243	-0.137	0.779	-0.112	-0.038
授業中で授業内容と関係ないことを勉強する	-0.055	0.057	0.669	-0.099	-0.072
授業中でよく居眠りをする	-0.072	0.001	0.558	-0.047	-0.114
授業中で私語をすることが多い	0.003	0.023	0.413	0.102	-0.034
大学での勉強は意味がないと思う	0.096	0.035	0.370	-0.312	-0.160
大学の授業では幅広い知識を得ている	0.208	0.020	-0.056	0.783	0.131
大学の授業では専門的な知識を得ている	0.160	0.013	-0.058	0.707	0.238
自分が成績を重視している	0.125	0.187	-0.144	0.241	0.565
授業はできるだけ休まないようにしている	0.172	0.049	-0.145	0.176	0.509
卒業に必要な授業しか取っていない	0.014	-0.137	0.228	-0.060	-0.035
累積 %	10.963	21.530	31.213	38.989	45.332
分散の %	10.963	10.567	9.683	7.776	6.342
回転後の負荷量平方和	2.083	2.008	1.840	1.477	1.205
Kaiser-Meyer-Olkin	0.832				

因子抽出法: 最尤法
回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

表４：学習行動と進路意識の関連性

	就職希望がある			進学希望がある		
	はい	いいえ		はい	いいえ	
授業重視	0.115	-0.125	***	-0.062	0.081	*
自主学習	-0.229	0.215	***	0.182	-0.272	***
不真面目	0.054	-0.039	n.s.	-0.044	0.055	n.s.
学習の肯定	0.022	-0.015	n.s.	0.047	-0.040	n.s.
他動的学習	0.167	-0.176	***	-0.166	0.243	***

注：＊ p<5%，** p<1%，*** p<0.1%，n.s. p≥10%。以下の表も同様に表記した。

て，【自主学習】では，「はい」と回答した者の平均値は -0.229と，「いいえ」の0.215よりはるか低い値となっている。ここから，授業を重視すればするほど，また学習する理由が他動的である方が，就職への関心が高くなることが分かった。

続いて，進学希望があるという部分の分析結果を見てみよう。まず，【授業重視】には「はい」と回答した者の得点は -0.062となり，より低い値となっている。【他動的学習】にも同じ傾向が見られた。それに反して，【自主学習】という因子では，「はい」と回答した者の得点はより高く，0.182となっている。ここから，自主学習が重視すればするほど，また学習理由が他動的ではなく，授業重視しないほど，進学希望が高くなることが言えよう。

上記の分析結果に基づき，次のことが推測できよう。まず，【授業重視】の得点が高い者ほど，就職志向が高く，進学志向が低いという結果が得られた。その原因は【授業重視】の大学生は大学教育を就職と関連付けているためだと推測される。つまり，彼・彼女らは授業を就職に繋がるもの，あるいは役立つものと考えている。これは【他動的学習】の得点が高い者は，進学志向より就職志向が強いという結果からも裏付けられる，就職志向の大学生は授業を重視していても，必ずしも自主的に勉強するわけではない。それが彼・彼女らの進学に対する否定的な意識に繋がっている。

他方，【自主学習】の得点が高い者ほど，進学志向が高いという，上とは逆の結果が得られた。この結果から，進学志向の高さは，自発的な学習に対する意欲によって規定されていることがわかろう。

3.2 大学での生活

大学での生活については10項目を設定した。分析においては天井効果を考慮しながら，正規性から著しく逸脱する１項目を除外し，残りの９項目を用いて因子分析（最尤法，バリマックス回転）を行った。その結果が表５である。因子負荷量の平方和，および，解釈しやすさの観点から，二つの因子を抽出した。第一因子は「身なりに気をつけている」や「ネットやテレビや雑誌などを利用し，よく流行をチェックする」などの項目に構成されることから【ファッション重視】と命名した。第二因子は「よく友達とパーティーをする」や「よくカラオケ行く」などの項目により構成されており，【遊び志向】と命名した。

続いて，大学生活と進路意識との関連性を検討するため，表６に分散分析の結果を示した。まず，就職希望の部分の分析から見ると，「はい」と回答した者の【ファッション重視】の因子得点が0.075と，「いいえ」の得点より高い値となっている。また，【遊び志向】にも同じ傾向が見られた。次に，進学希望部分の分析を見れば，「はい」と回答した者は【ファッション重視】の得点は -0.047であり，【遊び志向】の得点は -0.066というように，「いいえ」と回答した者より低い値となっている。ここから【ファッション重視】すればするほど，就職志向がより高く，進学志向が低いという結果になっている。その一方で，【遊び志向】が強ければ強いほど，就職志向が高く，進学志向が低いことが分かろう。つまり，【ファッション重視】と【遊び志向】は流行をチェックすることや友達作りなどの大学での生活を重視し，進学より就職への意識が高いことが明らかにした。

本章の分析結果を踏まえ，大学での学習行動と大学での生活が大学生の進路意識に関連していることが明らかにされた。ただし，本章の分析結果のみでは変数間の相互的な影響が考慮されていないため，大学での学習行動や生活と進路意識とはどのような関連性を持っているのかを十分に説明することができない。そこで，次章では，大学のランクなどの統制変数の影響を考慮しながら，大学生の進路意識の規定要因を検討する。

４．進路意識の規定要因

本章では，進路意識を就職志向および，進学志向という二つの側面に分け，まず大学ランク別に進路分化の実態を概観してから，それぞれの規定要因を検討す

表５：大学での生活の因子分析

	ファッション重視	遊び志向
身なりに気をつけている	0.577	0.108
部活に積極的参加している	0.518	0.053
ネットやテレビや雑誌などを利用し、よく流行をチェックする	0.395	0.213
よく運動する	0.382	0.109
よく友達とパーティーをする	0.274	0.658
よくカラオケ行く	0.315	0.528
毎日ゲームをする	0.004	0.387
アルバイトにたくさんの時間をかけた	0.292	0.205
累積％	14.522	26.717
分散の％	14.522	12.194
回転後の負荷量平方和	1.162	0.976
Kaiser-Meyer-Olkin	0.724	

因子抽出法：最尤法
回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

表６：大学生活と進路意識の関連性

	就職希望がある			進学希望がある		
	はい	いいえ		はい	いいえ	
ファッション重視	0.075	-0.084	**	-0.047	0.073	*
遊び志向	0.087	-0.103	***	-0.066	0.077	**

る。その結果,「一本大学生」と比較することにより,「三本大学生」は進路意識が大学での学習行動と緊密に関連をしていることが明らかにされた。具体的には自主学習への意識が高ければ高いほど，就職志向が低くなり，進学志向が高くなる。

4.1 ランク別にみる進路分化

本節では，クロス集計により，大学のランクによって異なる進路分化の実態を概観したい。進路意識について，質問紙には「卒業した後，すぐ就職すると考えていますか」と「進学するつもりはありますか」という二つの項目を設定した。それをクロス集計した結果は表７となる。

表７が示しているように，大学のランクは進路意識と統計的に有意であることが確認できた。大学のランクごとに見てみよう。「一本大学生」では，就職希望あるかどうかについて，「いいえ」と回答した者は77.5％と，非常に高い数値となっており，「進学したい」と考えている者の割合も８割以上に達している。ここから，「一本大学生」は進学志向が非常に高いことが分かった。それに反して，「二本大学」と「三本大学」のデータから見ると，「就職志向がある」と「進学志向がある」と回答した割合は「二本大学」は63.5％と50.9％となっており，「三本大学」は50.7％と61.0％というように，ほぼ同数である。このことから，「二本大学」と「三本大学」では，進学志望者と就職志望者が拮抗していることが分かった。

李（2005）は「高等教育の拡大改革によって，大学歴の効果が低下し，かわりに『ヨコの学歴』－学校歴

表７：ランク別の進路意識

		一本大学	二本大学	三本大学	合計	X^2	
就職希望がある	はい	22.5%	63.5%	50.7%	49.0%	100.514	***
	いいえ	77.5%	36.5%	49.3%	51.0%		
進学希望がある	はい	80.4%	50.9%	61.0%	61.7%	54.231	***
	いいえ	19.6%	49.1%	39.0%	38.3%		

の重要性が高まった」(p.165) と指摘している。同様の傾向が本節での分析結果からも読み取れるだろう。就職難問題や大学院の進学バブル化問題がますます深刻になっている中国においては，エリート大学生は，就職する際にも重要視され，進学する際にも，名門大学への進学機会が多い。つまり，エリート大学出身の大学生は就職する際にも，進学する際にも，それ以外の大学生と比べれば，より有利な立場に立っている。このことは，上記の結果に影響を及ぼす可能性がある。つまり，大学のランクが高いとは言えない「二本大学生」と「三本大学生」は就職にも進学にも不利な立場になる。それゆえ進路の可能性を広げるため，進路意識が曖昧になると推測できよう。

4.2 就職志向の規定要因

本節では，「どのような大学生が就職に関心を持っているのか」という問いにもとづき，二項ロジスティック回帰分析を用いて，就職志向の規定要因を検討する。

なお，データの性質を統一するために，分析では，文系に偏る「二本大学」のサンプルを除き，「一本大学」と「三本大学」で理系の学生のみを分析対象とした。また，分析で用いたモデルについて，大学のランクが大学生の就職志向に影響しているかどうかを検討するため，全体のデータ（「一本大学」と「三本大学」の理系）を用いてモデル１のように分析した。また，「一本大学生」と比較し，「三本大学生」の就職志向の特徴を明らかにするため，モデル２を設定した。

なお，二項ロジスティック回帰分析で使用する変数は以下の通りである。

【従属変数】

就職希望ダミー：「卒業した後，すぐ就職すると考えていますか」という質問に「はい」＝１，それ以外＝０。

【独立変数】

「三本大学」ダミー：「三本大学」＝１，それ以外＝０のダミー変数。

学年：一年生＝１，二年生＝２，三年生＝３，四年生＝４。

女性ダミー：女性＝１，男性＝０のダミー変数。

表８：就職志向のロジスティック分析

	モデル1			モデル2					
	一本大学と三本大学			一本大学			三本大学		
	B	Exp(B)		B	Exp(B)		B	Exp(B)	
定数	0.407	1.503	n.s.	2.193	8.966	n.s.	0.222	1.249	n.s.
三本大学ダミー	0.820	2.271	**	—	—	—	—	—	—
調査対象者の属性									
学年	0.300	1.349	**	0.333	1.395	n.s.	0.327	1.386	*
女性ダミー	-0.231	0.794	n.s.	-0.909	0.403	n.s.	0.076	1.079	n.s.
父親の学歴	-0.078	0.925	n.s.	0.079	1.082	n.s.	-0.128	0.879	n.s.
母親の学歴	-0.090	0.914	n.s.	-0.355	0.701	**	0.016	1.016	n.s.
都市以外出身ダミー	0.526	1.693	*	0.122	1.130	n.s.	0.563	1.756	n.s.
現在進学する大学に満足度	-0.044	0.957	n.s.	-0.139	0.870	n.s.	-0.006	0.994	n.s.
大学での生活									
ファッション重視	0.411	1.508	*	-0.006	0.994	n.s.	0.559	1.749	*
遊び志向	-0.109	0.896	n.s.	-0.112	0.894	n.s.	-0.225	0.798	n.s.
大学での学習									
学習の肯定	0.010	1.011	n.s.	0.033	1.033	n.s.	0.018	1.018	n.s.
他動的学習	0.434	1.543	*	0.834	2.304	*	0.277	1.319	n.s.
授業重視	0.165	1.179	n.s.	0.384	1.468	n.s.	0.114	1.120	n.s.
自主学習	-0.710	0.492	***	-0.371	0.690	n.s.	-0.775	0.461	***
不真面目	0.193	1.213	n.s.	0.475	1.608	n.s.	0.241	1.273	n.s.
Nagelkerke R^2	0.293			0.341			0.200		
Omunibus test X^2	101.991		***	44.811		***	39.522		***
N	420			117			243		

父親の学歴：連続変数（9，12，15，16，19）
母親の学歴：連続変数（9，12，15，16，19）
都市以外出身ダミー：中小都市，農村部＝1，それ以外＝0。
現在進学する大学に満足度：連続変数（1，2，3，4，5）
大学での生活：大学での生活に関連する二つの因子得点（【ファッション重視】と【遊び志向】）
大学時代の学習行動：学習行動に関連する四つの因子得点（【授業重視】，【自主学習】，【不真面目】）および，学習する理由に関連する二つの因子得点（【学習肯定】【他動的学習】）

上記の諸変数を二項ロジスティック回帰分析に投入し，分析を行った結果を表8に示した。

まず，モデル1【一本大学と三本大学】を見てみよう。「三本大学ダミー」，「学年」，「都市以外出身ダミー」，【ファッション重視】，【他動的学習】，【自主学習】という変数とも，「すぐ就職すると考えているダミー」とは統計的に有意であった。つまり，これらの変数とも就職志向と関連性を持っている。ここでは有意確率がより高い「三本大学ダミー」と【自主学習】という二つの変数について説明したい。表8からわかるように，「三本大学ダミー」のオッズ比は2.271で，【自主学習】のオッズ比は0.492となっている。ここから，「三本大学生」である方，また【自主学習】が重視すればするほど，就職志向が高いという結果が読み取れる。

次に，モデル2【一本大学】の結果をみると，「就職希望ダミー」には，「母親の学歴」や【他動的学習】と有意な効果が見られた。ここから，「一本大学生」は母親の学歴が低ければ低いほど，就職に対する関心が高いことが分かった。続いて，モデル2【三本大学】の結果を見ると，「学年」や【ファッション重視】や【自主学習】という三つの変数とも「就職希望ダミー」とは統計的に有意であった。ここでは，【自主学習】について着目したい。そのオッズ比は0.461と高くなっている。ここから，「三本大学生」は，自主学習への意識が高ければ高いほど，就職志向が高くなっているこ

表9：進学志向のロジスティック分析

	モデル3			モデル4					
	一本大学と三本大学			一本大学			三本大学		
	B	Exp(B)		B	Exp(B)		B	Exp(B)	
定数	-0.017	0.983	n.s.	-2.705	0.067	*	1.291	3.636	n.s.
三本大学ダミー	-0.172	0.842	n.s.	—	—	—	—	—	—
調査対象者の属性									
学年	-0.277	0.758	*	-0.230	0.794	n.s.	-0.304	0.738	n.s.
女性ダミー	0.279	1.322	n.s.	0.526	1.692	n.s.	0.286	1.331	n.s.
父親の学歴	0.062	1.064	n.s.	-0.081	0.922	n.s.	0.087	1.091	n.s.
母親の学歴	0.041	1.041	n.s.	0.359	1.432	**	-0.093	0.911	n.s.
都市以外出身ダミー	-0.553	0.575	*	0.016	1.016	n.s.	-0.684	0.504	*
現在進学する大学に満足度	0.143	1.154	n.s.	0.232	1.261	n.s.	0.104	1.109	n.s.
大学での生活									
ファッション重視	-0.545	0.580	**	-0.112	0.894	n.s.	-0.733	0.480	**
遊び志向	-0.002	0.998	n.s.	0.175	1.191	n.s.	0.022	1.023	n.s.
大学での学習									
学習の肯定	0.220	1.246	n.s.	0.372	1.451	n.s.	0.159	1.173	n.s.
他動的学習	-0.553	0.575	**	-0.862	0.422	*	-0.460	0.631	*
授業重視	-0.200	0.819	n.s.	-0.768	0.464	*	0.097	1.102	n.s.
自主学習	0.986	2.679	***	0.341	1.406	n.s.	1.131	3.100	***
不真面目	0.074	1.077	n.s.	-0.461	0.631	n.s.	0.165	1.180	n.s.
Nagelkerke R^2	0.267			0.351			0.283		
Omunibus test X^2	86.493		***	45.794		***	54.914		***
N	412			176			236		

とがわかる。

4.3 進学志向の規定要因

本節では「三本大学生」の大学院への進学志向の規定要因を解明するために，従属変数を「進学希望ダミー」（進学するつもりがありますかという質問に,「はい」と回答するなら１，それ以外は０）と設定し，前節と同様のモデルを用いて分析する。その結果は表９となる。

まず，モデル３【一本大学と三本大学】の結果から見ると,「進学希望ダミー」は「学年」,「都市以外出身ダミー」,【ファッション重視】,【他動的学習】,【自主学習】という変数とも有意な効果が見られた。とくに,【ファッション重視】,【他動的学習】,【自主学習】という三つの変数の分析結果から，ファッション重視ではない方，学習理由は他動的ではない方，また自主学習への意識が高い方は進学志向が高いことがわかった。しかし,「三本大学ダミー」は「進学希望ダミー」との間に有意な相関が見られなかった。すなわち,「三本大学」であることは，進学志向に影響を与えないという結果になっている。

次に，モデル４【一本大学】の結果を見てみよう。「進学希望ダミー」は「母親の学歴」【他動的学習】,【自主学習】という三つの変数とも統計的に有意な効果がみられた。とくに「母親の学歴」という変数の分析結果から見ると,「一本大学生」は母親の学歴が高ければ高いほど，大学院に進学しやすくなることが分かった。

続いて，モデル４【三本大学】の結果を見てみよう。「都市以外出身ダミー」,【ファッション重視】,【他動的学習】および【自主学習】といった変数とも,「進学希望ダミー」との間に有意な相関が検証された。【ファッション重視】と【自主学習】という二つの変数の分析結果から,「三本大学生」は【ファッション重視】をすればするほど，大学での【自主学習】を重視すればするほど，進学意識が高いということが言えよう。

以上の分析では，進路意識を就職志向と進学志向に分けて検討してきた。ここから得られた知見をまとめ，進路意識全体的な傾向について述べたい。まず，大学のランクは，大学生の就職志向とは関連していることが検証された一方，進学志向とは，他の変数を一定とすると，表７が示す結果と異なり，有意な影響が確認できなかった。また，進路分化の実態を大学ランク別に分析する際に,「一本大学生」は非常に高い進学意識を持っているという結果を加えれば,「三本大学生」が「一本大学生」と同じく非常に高い進学意識を持っていることが推測できよう。賈（2014）は「三本大学生」へのインタビューにより，彼・彼女らは大学院に進学することを,「第二回の高考（全国統一試験）」と捉えていると述べ，ある「三本大学」では半数以上の大学生が進学しようとしていることを指摘した。本稿では,「一本大学生」と比較することにより,「三本大学生」の進学意識が非常に高いことをさらに検証できたといえよう。

次に,「一本大学生」の進路意識は母親の学歴と緊密に関連していることが検証された。具体的には，母親の学歴が高ければ高いほど，進学志向が高く，就職志向が低くなる傾向が見られた。つまり,「一本大学生」の進路意識の形成が出身階層に影響されていることが推測できよう。

最後に「三本大学」の分析結果を見てみよう。【自主学習】という因子が就職希望ダミーとも，進学希望ダミーとも統計的には有意であったことが分かった。具体的には，自主学習を重視すればするほど，進学志向が高く，就職志向が低いという結果になっている。しかし，このような結果は「一本大学」のモデルには検証されていなかった。ここから,「三本大学生」の特徴として，彼･彼女らの進路意識は大学での行動（意識）と緊密な関連をしていることが言えよう。

５．まとめと考察

上記の分析結果をまとめれば，大きく以下の二点になる。

①「三本大学生」は「一本大学生」と同様に非常に高い進学意識を持っている。

②「三本大学生」の進路意識は,大学での学習行動（意識）と強く関連している。

これらの知見に基づき，以下の２点について考察しておきたい。第一に，現在の「三本大学」は期待されている役割を果たしていないことが指摘できよう。2006年の教育部『普通高等学校独立学院教育合格評価指標体系』をきっかけに,「一本大学」は「研究型人材」を育成する機関,「二本大学」と「三本大学」は「応用型人材」を育成する機関と位置づけられることになった。熊(2018)は地方大学(「二本大学」,「三本大学」)が応用型人材を育成するという路線から外れ，研究型人材養成のスタイルをとり続けたことが，現在の進学バブルを助長したと批判し，地方大学は学術的な知識より職業教育をさらに重視する必要性があると強調した。本稿の結果は，この熊の主張を裏付けるものである。つまり,「三本大学生」は依然として「一本大学生」と同様に高い進学志向を持っていた。「三本大学」は「職業教育を重視すべき」,「応用型人材を育成すべ

き」などのスローガンを掲げているが，その職業教育は政府が意図した方向には進んでいないことになる。鮑（2006）が民弁大学や独立学院はいまだ公立セクターの特性を払拭できていないと指摘したように，「三本大学」は今もなお公立セクターの役割を果たしており，期待される個性を持ち得ていないことになる。

第二に，「三本大学生」のみ，大学での学習行動と進路意識に関連が見られたことについて考察したい。本分析は，「三本大学生」は自主学習への意識が高ければ高いほど，進学志向が強く，就職志向が弱いということを明らかにした。しかし，「一本大学生」のモデルをみると，このような学習意識と進路希望との関連は見られなかった。呉（2020）は調査対象校のＤ大学では，高等教育機関にもかかわらず，中等教育機関の行事である「**跑操**」[5] がいまだに行われていることを紹介し，「このような学生指導の在り方は大学での学習に対しても行われている」（p.42）と述べた。その上で，「三本大学生」の大学での学習に対する意識が非常に高い原因は，大学が上記に代表されるような教育と生活の両面に渡る指導を行っている，つまり，「三本大学」が「学校化」にあるという仮説を提示した。本稿で得られた結果を考えると，このような大学自体の取り組みが「三本大学生」の進路意識にも影響を及ぼしていることが言えよう。つまり，「三本大学生」の高い進学志向は学生の自発的なものではなく，大学自体の取り組みや現在の進学熱という社会背景など外部の要因に影響されている。2019年から，キャリア教育の重要性が再び高等教育の領域で強調されるようになった。「三本大学生」に適切なキャリア教育を模索する際に，この特徴を考慮することが必要であろう。職業教育，いわゆる職業的なレリバンスより，いかに自らの意志で合理的に進路を選択するのかを指導するようなキャリア教育こそ，現在進学のバブルで躊躇している「三本大学生」にとっては，必要なものだと考えられよう。

【注】

1）「足切り点」は毎年異なるため，ここでは遼寧省の2012年の全国統一試験の成績（理系）を例として挙げて説明したい。2012年の各ランクの足切り点はそれぞれ，517点，445点，388点であった。「一本，二本，三本大学」の上線累積パーセントはそれぞれ19%，43%，78%である。

2）その呼称の由来は中国教育部が公布する「211プロジェクト」と「985プロジェクト」という二つの政策に遡ることができる。中国のエリート大学を意味する。

3）独立学院は公セクターの大学と民間の投資者が連携して設立した高等教育機関である。

4）日本の私立大学を意味する。

5）中国の中等教育機関では学生の精神を磨き，学習への集中力を高めるために「**跑操**」が行われる。「**跑操**」とは，学校側が時間帯を決めて，強制的に全校の学生に走らせるという活動である。（呉2020，p.42）

【引用・参考文献】

鮑威，2005，「**关于我国民办高等教育发展路径和发展机制的施政研究**」『教育発展研究』第12期，pp.55-59.

鮑威，2006，『中国の民営高等教育機関』東信堂。

贾秉权，2014，「**三本大学生的真实处境与愿望**」『西北成人教育学院学報』第5期，pp.75-77.

高静，2011，「中国における大学生の就職意識」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部，第60号，pp.73-82.

葛城浩一，2010，「難易度の低い大学における学習行動」『比治山高等教育研究』第３号，pp.49-61.

李敏，2005，『中国高等教育の拡大と大卒者就職難問題』広島大学出版会。

劉文君，2007，「高等教育のマス化と構造変化」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第47巻，pp.339-450.

西本佳代，2008，「大学生の学習行動に及ぼす就職意識の影響」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部第57号，pp.125-132.

大塚豊，1998，「中国高等教育の民営化に関する考察」広島大学大学教育研究センター大学論集第29集，pp.61-79.

大塚豊，2007，『中国大学入試研究』東信堂。

邵姜魏，2014，「民営大学に対する学生の意識調査 - 山東省の青島工学院を事例として」早稲田大学大学院教育学研究科紀要第22号 -1，pp.23-33.

武内清，2003，『キャンパスの今』玉川大学出版部。

王偉，2005，「学部生の進路志向における家庭的背景の影響」『教育社会学研究』第76 集，pp.245-263.

王傑，2008，『中国高等教育の拡大と教育機会の変容』東信堂。

魏丽娜・劉涛，2010，「**辅导员对高校“三本”大学生就业观教育**」『中国西部科技』，第34期，pp.87-88.

呉彤，2019，「中国の『三本大学』における学生の進路意識」教育学研究紀要 CDROM 第65巻，pp.648-652.

呉彤，2020，「中国の『三本大学』における学生の学習行動」教育学研究ジャーナル第25号，pp.33-43.

熊丙奇，2013，「**也谈史上最难就业年中的泡沫**」『河南高等教育報』第７期，pp.36-37.

熊丙奇，2018，「考研熱折射的高等教育普及化時代的学歴社会問題」『上海教育評估』第２期，pp.23-58.

山田浩之・葛城浩一，2007，『現代大学生の学習行動』広島大学高等教育研究開発センター。

山田浩之，2009，「ボーダーフリー大学における学生調査の意義と課題」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部，第58号，pp.27-35.

山田浩之，2010a，「ボーダレス・ユニバーシティ研究の現状と課題」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第56巻，pp.262-267.

山田浩之，2010b，「地方大学における学生の学習行動と学習意識－大学の学校化がもたらす学習の形骸化－」『比治山高等教育研究』第３号，pp.37-48.

喻永光，2013，「独立学院考研学生心理探析」『**经营管理者**』，第10期，p.270.